

# 詩と魔術

— ノヴァーリスの『青い花』 —

時 田 郁 子

## 1 詩人の誕生

— ノヴァーリスとハインリヒ・フォン・オプターディンゲン

フリードリヒ・フォン・ハルデンベルク (1772-1801) は、1798年2月24日、文学仲間のアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル (1767-1845) に断章を纏めた原稿 (これは『花粉』の題名で雑誌『アテネウム』に発表される) と手紙を送り、「あなたにこれを発表する気持ちがありましたら、ノヴァーリスというペンネームを使っていただきたい。この名は私の古い祖先の名であり、不適切なものではありません。」<sup>1)</sup>と述べ、これ以降、彼は Novalis というペンネームを用いる。彼の祖先は 1190 年頃に »de Novali«, »von Rode« や »magna Novalis« von dem Ort »Großrode« と名乗っており、時代が下ると、居住する城に因んで »de Hardenberg« と名乗るようになった。ラテン語の Novalis は「新しい地を耕す者」を意味し<sup>2)</sup>、ここにドイツ・ロマン派という文学運動を興して「新しい地を耕す」詩人ノヴァーリスが誕生した。

- 
- 1) Novalis: Werke, Tagebücher und Briefe Friedrich von Hardenbergs. Hrsg. von Hans-Joachim Mähl und Richard Samuel. Bd.1. München/Wien 1978, S.661f. 以下、本書からの引用は巻数とページ数を記す。
  - 2) Vgl. Novalis: Werke, Tagebücher und Briefe Friedrich von Hardenbergs. Hrsg. von Hans-Joachim Mähl und Richard Samuel. Bd.3. München/Wien 1978, S.249. 以下、本書からの引用は巻数とページ数を記す。

ノヴァーリス誕生のきっかけは、彼が親しい人たちを相次いで失った後、神秘的な体験をしたことにある。1797年3月19日、婚約者ゾフィー・フォン・キューン(1782-1797)が肺結核と肝臓の腫瘍のために亡くなり、その直後の4月14日、2歳年下の弟エラスムスも亡くなったため、フリードリヒは深い衝撃を受け自殺まで考えるほどだったが、5月13日にゾフィーの墓参りをしたときに恍惚体験をする。「夕方私はゾフィーのところへ行った。そこで筆舌に尽くしがたい喜びを味わった—閃く熱狂の瞬間—私は墓を塵のように自分の前で吹き飛ばし—数百年は一瞬のようだった—彼女が近くにいると感じられた—私は彼女をいつでも呼び出すことができると思った。」(Bd.1 S.463)それは、「私」が生と死の境界にある「墓」を吹き飛ばし、その境界を止揚し、「数百年」と「一瞬」を等価にする体験であり、フリードリヒはノヴァーリスとなってこの体験の言語化に格闘することになる。

ノヴァーリスは未完の長編小説『ハインリヒ・フォン・アフターディンゲン』(1801)<sup>3)</sup>に関して、1800年2月23日に文学仲間のルートヴィヒ・テイク(1773-1853)に宛てた手紙に次のように記した。「この本は二巻本になる予定です。—第一部はうまくいけば3週間で仕上がります。これは第二部のヒントや土台になるものを含んでいます。全体は詩<sup>ポエジー</sup>礼賛になるはずです。ハインリヒ・フォン・アフターディンゲンは第一部で成熟して詩人になり—第二部で詩人として変容します。」(Bd.1 S.732)ここで「アフターディンゲン」と表記されるのは、ノヴァーリスの死後、この小説を編集・出版したテイクやフリードリヒ・シュレーゲル(1772-1829)の判断によりアフターディンゲンという一般的な表記に統一されるものの、ノヴァーリスは一貫してアフターディンゲンと記したためである<sup>4)</sup>。第一部

- 3) 『ハインリヒ・フォン・アフターディンゲン』は日本で『青い花』の題名で受容された経緯があるため、本稿では作品名を記す際に『青い花』とする。
- 4) 初期ロマン派の交友関係については、今泉文子『ロマン主義の誕生—ノヴァーリスとイエーナの前衛たち』平凡社選書、1999年参照。

「予感」では、ハインリヒが旅を通して経験を積み、マティルデと出会い婚約する経緯が描かれ、これが「成熟して詩人にな」る段階に相当する。第二部「成就」の冒頭で詩人の婚約者が水死したとほのめかされる。青年が恋人を得て詩人になり、恋人の死を経て変容するという流れは、ノヴァーリスの伝記的事実に重なり、ハインリヒはノヴァーリスの分身的存在と考えられる。

ところで、ハインリヒ・フォン・オプターディングンはヴァルトブルクの歌合戦伝説に登場する詩人の名前である。伝説では、歌合戦に参加した詩人たちのうち、敗れた者に死が与えられると取り決めてあったにもかかわらず、ハインリヒは死刑に処せられそうになると君主の奥方に命乞いをし、奥方の取りなしによって死を免れる。ノヴァーリスがこのような臆病で卑怯な人物を主人公のモデルにしたのはなぜか。第一部においてハインリヒは人好きのする二十歳の青年で詩の才能があると言及される (Vgl. Bd. 1 S.315) 程度であり、主人公にこの人物の名前を冠する必然性はないように見える。それでもノヴァーリスにそうする理由があるならば、それはこの詩人が大詩人クリングゾールを連れてくるためであろう。ノヴァーリスはハインリヒの婚約者マティルデをクリングゾールの娘とし、第一部の最終章で彼らにクリングゾールのメルヒェンに耳を傾けさせており、クリングゾールに重要な役割を与えたことは明白である。

本稿はノヴァーリスが主人公をハインリヒ・フォン・オプターディングンに設定した理由を探ることから出発して、ノヴァーリスが「<sup>ポエジー</sup>詩」として思い描いたものの解明を目指す。以下では、ヴァルトブルクの歌合戦伝説に関するノヴァーリスの理解を詳らかにし、彼がハインリヒ・フォン・オプターディングンを通して描こうとした詩人像を輪郭づける。そしてクリングゾールのメルヒェンを分析して、ここに込められたノヴァーリスの世界観を明らかにする。

## 2 ヴァルトブルクの歌合戦

ヴァルトブルクの歌合戦には、伝説として語り継がれた記録と、少し時代が下って写本に記されたテキストとがある。13世紀初頭、テューリングン方伯ヘルマンは叙事詩人ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ(1170?-1220/30)や抒情詩人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ(生年不詳)のパトロンであり、1207年にヘルマン方伯のヴァルトブルク城に六人の詩人が集まり歌合戦をしたと伝えられる。これに基づくラテン語の記録が残されており、ノヴァーリスはヨハネス・ローテの「聖エリーザベト伝」や「テューリングン年代記」を通してこの伝説を知っていた<sup>5)</sup>。

ヴァルトブルクの歌合戦伝説の写本には、1300頃-1340頃チューリヒで成立した「マネッセ歌謡写本」、14世紀中頃成立した「イエナ歌謡写本」、15世紀マインツで成立した「コルマール歌謡写本」、14世紀前半に成立した「ローエングリーン写本」がある<sup>6)</sup>。写本による伝説の流布にはチューリヒの学者ヨーハン・ヤーコプ・ボードマー(1698-1783)とヨーハン・ヤーコプ・ブライティンガー(1701-1776)が一役買い、彼らは1746年にパリの図書館所蔵の写本を借りだし、1748年に『13世紀のシュヴァーベンの子詩見本』として撰集を、1758-59年に二巻本の『ミネザング集』として全文を出版した。これによりドイツ語圏で歌合戦伝説が広まっていく。ボードマーはドイツ中世の文学作品に光を当てた人物として、ヴァルトブルクの歌合戦の他、1757年に『ニーベルンゲンの歌』のテキストを刊行して<sup>7)</sup>、ロマン派の詩人たちが中世に目を向けるきっかけを作った。とは

---

5) 岸谷敏子、柳井尚子『ワルトブルクの歌合戦 伝説資料とその訳注』大学書林、1986年、16ページ以下参照。

6) 上掲書29ページ参照。

7) ボードマーの知人の医師ヤーコプ・ヘルマン・オーベライト(1725-98)が1755年にフォーアアルベルクのホーエンエムス伯爵家の図書館で『ニー

いえ、18世紀後半にドイツ中世文学への理解は始まったばかりで、ロマン派の詩人たちが『ニーベルンゲンの歌』の作者をハインリヒ・フォン・オフターディンゲンと誤解していた節もある<sup>8)</sup>。『ニーベルンゲンの歌』の作者は21世紀現在ではヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハと同時代の騎士階級の教養人と考えられており<sup>9)</sup>、ロマン派の詩人たちの考えはあながち的外れとは言えず、ノヴァーリスは歌合戦の時点で未熟だった詩人が後に『ニーベルンゲンの歌』を作る大詩人になると考えていたのかもしれない。とはいえ、彼はヴァルトブルクの歌合戦を取り上げないとメモに記しており (Vgl. Bd.1 S.397)、伝説の前史のみを描くつもりだった。

写本のテキストは前編と後編から成る。「君主賛歌」と呼ばれる前編では、賞賛に値する最良の君主は誰かが論争になり、「なぞなぞ」と呼ばれる後編はキリスト教の教義を説き明かす宗教問答である。「君主賛歌」の冒頭、「今ここで最初の歌を／ハインリヒ・フォン・オフターディンゲンがテューリンゲンの高貴な君主の調べで歌う。／この君はいつも我々に財宝を分け与え、／私たちは彼に神の報いがあるように願っている。」<sup>10)</sup>とハインリヒ・フォン・オフターディンゲンが当時の形式に則って名乗るため、彼こそ「君主賛歌」の作者と考えられる。だが彼は後編の「なぞなぞ」に登場しない。研究史上、異なる作者による二つのテキストが後に合わせられたと考えられ<sup>11)</sup>、「君主賛歌」の末で彼が「たとえ私が三十年間

---

ベルンゲンの歌』の写本 (写本C) を発見すると、ボードマーは1757年にそのテキストを刊行した。その後、1768年にザンクト・ガレンで写本Bが、1779年にホーエンエムス伯爵家で写本Aが発見され、1782年にクリストフ・ハインリヒ・ミュラー (1740-1807) の手で完本が刊行された。石川栄作『「ニーベルンゲンの歌」を読む』、講談社学術文庫、2001年、251-252ページ参照。

- 8) Vgl. Curt Grützmacher: Zum Verständnis der Werke. In: Novalis: Monolog. Die Lehrlinge zu Sais. Die Christenheit oder Europa. Hymnen an die Nacht. Geistliche Lieder. Heinrich von Ofterdingen. Hrsg. von Ernesto Grassi unter Mitarbeit von Walter Hess. Reinbek bei Hamburg 1999, S.232.
- 9) 石川：上掲書 61 ページ参照。
- 10) 岸谷・柳井：上掲書 32 ページ。

水中にいたくなくてはならないとしても、／ハンガリーの／クリングゾールをここに呼びたい。」<sup>12)</sup>と述べた後、後編の「なぞなぞ」にクリングゾールが登場することにより、前編と後編がかろうじて結びつく。

歌合戦伝説におけるクリングゾールは、ハンガリーの宮廷で活躍する学者にして魔術師とされ、後にテューリンゲンの宮廷に嫁ぎ聖女に列せられるハンガリーの王女エリーザベト(1207-31)の誕生を予言する。彼はヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチファル』に登場する魔法の城の王クリンシオルを連想させ、悪魔と結託した人物としてネガティブに描かれるが<sup>13)</sup>、ノヴァーリスはクリングゾールを肯定的に描く。ノヴァーリスがそのような人物に讃辞を送るのには彼の詩人観が関わる。

### 3 ノヴァーリスの詩人像

#### 3-1 「歌の力」

『青い花』は「献辞」と『第一部 予感』(9章)、『第二部 成就』(「修道院、あるいは前庭」という章が途中まで執筆された)から成り、ノヴァーリスが「詩礼賛になるはず」と述べた作品の精髓は冒頭の「献辞」に凝縮すると考えられる。「献辞」は前半4連と後半の4連で構成される。冒頭の一連を見てみよう。

あなたは私の内に

広い世界の心情を深く覗こうとする高貴な衝動を引き起こした。

あなたの手で信頼が私をつかみ、

どんな嵐の中でも安全に私を運んでゆく。(Bd.1 S.239)

---

11) 岸谷・柳井：上掲書 20-28 ページ参照。

12) 岸谷・柳井：上掲書 76 ページ。

13) 岸谷・柳井：上掲書 11-15 ページ参照。

## 詩と魔術

冒頭「あなた」と呼ばれるのは、女性の姿で描かれる「詩神 (die Muse)」であり、「私」は作者ノヴァーリスと『青い花』の主人公の二人を指す。詩人は詩神に捉えられ、「広い世界の心情を深く覗こうとする」よう、世界を理解するよう運命づけられ、たとえ「嵐」になろうともこの運命から免れることはできないが、詩神への「信頼」があれば詩人は「安全」に進んでいくことができると記される。

後半の4連で「詩神」は「歌の力」と表記される。

歌の秘密に満ちた力は、永遠に姿を変えながら  
この世で私たちに挨拶をする、  
かなたでは永遠の平和の姿で陸を祝福し、  
こちらでは青春の姿で私たちの周りを流れゆく。

歌の力こそ、私たちの目に光を注ぎ、  
あらゆる芸術に対する私たちの感覚を呼び覚ます、  
そして陽気な人や疲れた人の心が  
陶酔した黙想の中でそれを味わう。

その力のふくよかな乳房から私は生命を飲んだ、  
私はその力によって、私が私であるものすべてになった、  
だから陽気に私の顔を上げよう。

私の最高の感覚はまだまどろんでいた、  
そのとき私はあの力が天使の姿で私の方へ漂ってくるのを見て、  
目覚め、その腕に抱かれて、あちらへ飛んでいった。(ebd.)

「歌の力」は「私たち」人間の外部に存在し、様々な姿を取って「挨拶」

つまり合図を送ってくる。この合図に気づく人が、「目に光を注」がれ、「芸術に対する」「感覚」を呼び覚まして、詩人になる。「啓蒙 (Aufklärung)」が光によって人間の蒙を啓く意味を持つと同様、「歌の力」という「光」が詩人を詩人たらしめ、詩人の「生命」そのものになる。最終連で「私」が「まだまどろんでいた」とあるのは、『第一部』冒頭におけるハインリヒのまどろみに繋がる。夢現の状態では歌の力が「天使の姿」を、おそらく未来の恋人の姿を取るのを見た後、「目覚めて」詩人の世界「へ飛んでいく」、とここに予言される。

### 3-2 夢

第一部の冒頭でハインリヒは目を覚まして、夢の素晴らしさを父に語る。父は最初のうち取り合わないが、若い頃に見た不思議な夢を思い出す。若き日の父は夢を見た直後に知り合いの乙女に求婚して結婚したのだが、この夢のことをすっかり忘れていた。

まずハインリヒの夢を見てみよう。夢の中の彼は見知らぬ遠くの国にいて、身軽に海を渡り、さまざまな場所で暮らし、輪廻転生を繰り返す。彼は情熱的な恋をした相手と永遠に別れることになり、明け方、暗い森を通過して峡谷にたどり着き、そこを登って、草原に至る。彼が草原の向こうの崖にある洞窟に入ると、泉を中心に広い空間が広がっていて、彼はここで泳いだ後、草地で休らう。

彼を強く引きつけたのは一本の丈のある淡青色の花だった。それは泉のすぐ脇にあり、幅広の輝く葉で彼に触れていた。そのまわりには色とりどりの花が無数にあって、芳しい香りが大気を満たした。彼は青い花だけを見た。名付けようもない優しさでその花をじっくり眺めた。ついに彼が花に近づこうとしたとき、花は突然動き出し、変わり始めた。葉は輝きを増し、伸びゆく茎にぴったり寄り添って、花が彼の方



へ折れ曲がり、花卉は広がった青い首を示した。そこには華奢な顔が漂っていた。(Bd.1 S.242)

彼は崖を登り、それまでより高い次元にたどり着いた後、洞窟という母胎を象徴する空間を通して異世界へ入り込む。この経過は、ノヴァーリスが参照したテューリンゲン地方の民間伝承、キュフホイザー山の不思議な花伝説と同じ図式を取る<sup>14)</sup>。不思議な花伝説では、貧しい羊飼いがキュフホイザー山を登っている途中、美しい花を見つけ、この花を婚約者への贈り物にしようと考えて自分の帽子に挿した。彼は、さらに登っていき、山頂で洞の入り口が開いていたため、そこに入って美しい小さな鉱物をたくさんポケットに詰めた。だが彼が外に出るやいなや洞の出入りが閉じ、その際に彼は躓いて帽子に挿してあった花をなくして悲しむが、ポケット内の鉱物のおかげで新婚生活の準備を整えることができた<sup>15)</sup>。この伝説において花の色は明記されないが、羊飼いが鉱山から出てきたときに花が回収されることから、花は鉱山の内部という異世界に入るための鍵だったと考えられる。ノヴァーリスの描く鉱山内部の泉は地底湖であり<sup>16)</sup>、ここに咲く青い花は泉の水の結晶化と考えることができる<sup>17)</sup>。ハインリヒが洞窟

14) Vgl. Bd.3 S.158.

15) Vgl. Johann Gustav Büsching: Volks-Sagen, Märchen und Legendens. Leipzig 1812, S.325-327.

16) ノヴァーリスは大学卒業後 1794 年にザクセン選帝侯国の役人になり、翌年から製塩所監督局で働き始め、97 年 12 月から 99 年 5 月までフライブルクの鉱山学校で当時最先端の自然科学を学んだ。彼の勤務先の製塩所（アルテルン、ケーゼン、デュレンベルク）では塩泉が川のように流れるため、地底湖とは無関係だが、彼が学んだフライブルクには 10 世紀に始まる銀鉱があり、彼はここで何度も地底へ降りたはずであり、またバイエルンにあるベルヒテスガーデンの地底湖についても知っていたことだろう。デュレンベルクの製塩所について、以下の報告を参照した。上野ふき「ノヴァーリス及びドイツ・ロマン主義における自然科学的環境と文学の関わり—ドイツの鉱山をめぐって」『人文学フィールドワーカー養成プログラム』調査報告、2008 年、161 ページ以下。

17) Vgl. 宮田眞治「覚醒へ向けての夢想—『ハインリヒ・フォン・オフターデ

内の泉で見つけた青い花もまた異世界への鍵であり、山腹に咲く花よりも純度が高く、鉱山内部から奥深くの異世界へ彼を誘う。

若き日のハインリヒの父も似た夢を見ていた。夢の中で彼は洞窟に入り、そこで出会った老人に導かれて進んでいくと、「いたる所に泉や花があり、すべての花の中で一輪の花がとくに私の気に入った。他の花々がその花にお辞儀をしているように思えた。」(Bd.1 S.247)すると老人は彼にこう述べる。

君は世界の不思議を見たのだよ。この世で最も幸せな者になるのも、さらに有名人になるのも君次第だ。私が言うことをよくお聞き。聖ヨハネの日の夕方ここに再び来て、この夢を理解したいと心から神に願えば、君はこの世の最高の運命に恵まれるだろう。それからよく注意するのだよ。君はこの上で見つけるであろう青い花を折り、それから神の導きに身を委ねることだ。(Bd.1 S.247)

ハインリヒの父は自分の見た花の色を覚えていないが、他の花々がその花に向かってお辞儀をする点は、ハインリヒの見た青い花に似ている。この老人は、ハインリヒが第二部で出会う重要人物で、青い花を「世界の不思議」と表現する。この花を見た者は、「世界で最も幸せな者」にも「有名人」にもなれる可能性を持ち、「この世の最高の運命に恵まれる」。そのためには聖ヨハネの日にだけ咲く青い花を手に入れる必要がある。聖ヨハネの日は6月24日、ヨーロッパでは夏至の祭が行われる。夏至の祭にはキリスト教が普及する以前の自然宗教の名残があり、太陽が一年のうち最も高い位置に達するこの日は神聖視され、前夜に摘んだ薬草は高い効果を持つとも言い伝えられる。青い花は一年のうちこの日にだけ咲き、花を手

---

インゲン』試論(1)―』『京都大学文学部独文研究室研究報告』4, 1990, S.74f.

にした者に異世界への扉を開く。だがハインリヒの父は夢の続きで見た娘への恋心を燃え立たせ、彼女に求婚するために慌ただしく帰路に就いたのだった。

父と息子二代の夢に現れた青い花は、「世界の不思議」であり、己を見た者を異世界へ誘う。老人は若き父に「夢を理解したい」ならば、とそのため方法を教えたが、父の場合は恋心が勝り、老人のいう「最高の運命」を享受しなかった。父にとって夢は理解の対象にすぎず、恋に劣るものだったが、ハインリヒは「夢を夢としてそのままに受け止め、記憶し、いつか夢の意味が開示されるのを予感する。」<sup>18)</sup>彼は「夢の自律性を尊重する」<sup>19)</sup>ために詩人になるのであり、ここでは詩人になることが「最高の運命」とされる。

ハインリヒはその後、母とともに、ヴァルトブルク城の麓にあるアイゼナハから母方の祖父の暮らすアウグスブルクへ、父の知り合いの商人たちと旅立ち、その途中、さまざまな人から話を聞いて見識を広げる。彼は、第二章末で語られるアリオン伝説<sup>20)</sup>や第三章のアトランティスのメルヒェン<sup>21)</sup>を通して徐々に歌の力に気付き、目的地アウグスブルクの祖父の館で

18) 中井章子『ノヴァーリスと自然神秘思想』創文社、1998年、328ページ。

19) 同上。

20) ノヴァーリスはアリオンの名前を出さずにヘロドトスの『歴史』1-24で語られる伝説をほぼそのまま取り入れた。ある詩人が異国に出かけてたくさんの財産を持って帰国しようと船に乗った。船乗りたちが財宝を奪うため詩人を殺そうと考えたので、詩人は命乞いをしたが許されず、かろうじて辞世の歌を歌う許可を得て、歌った後海へ飛び込んだところ、この歌に感銘を受けた海獣が彼を岸に送り届けた。後日詩人が感謝を込めて歌を奏でると、海獣が海に沈んだ彼の財産を届けてくれたという。ヘロドトス（松平千秋訳）『歴史（上）』岩波文庫、2007年、26-28ページ参照。

21) 芸術の盛んな国アトランティスで王女の結婚が待望されていたが、王女にふさわしい相手が見つからない。あるとき王女は宮殿の外で自然を研究している父と息子に出会う。この親子と話した後、王女は宮殿の生活に味気なさを覚えて、宮殿から姿を消し、息子と結婚する。その一年後、花婿となった青年は宮殿に現れて歌を歌い、王に願いを叶えてもらう許可を得る。青年の歌に感銘を受けた王の前に、赤ん坊を抱えた王女が現れ、青年と王女は結婚を認められ、幸せに暮らす。このメルヒェンは、芸術が墮落してしまったアト

クリングゾールと出会い、詩人の役割への理解を深めていく。

### 3-3 師匠クリングゾール

ハインリヒはクリングゾールとの出会いを予感していた。第五章で彼ら一行は宿で知り合った老鋳夫に近場の洞窟へ連れて行ってもらい、洞窟の深いところから聞こえてくる歌声の主を探して、隠者に会った。隠者は老鋳夫と含蓄ある対話を交わした後、ハインリヒに書物を見せる。それはプロヴァンス語で描かれた挿絵付きの本で、彼はそれらの絵にさまざまな姿の自分が描かれていることに驚き、この本がある詩人の数奇な運命を描くものであると隠者から教わる。(Vgl. Bd.1 S.313) これは、ハインリヒが詩人となり「数奇な運命」を辿ることを予言する本であり、彼は一目でクリングゾールが本に載っていた人物だと気づいた。第六章でアウグスブルクに到着したハインリヒは、祖父に歓迎され、祖父の友人クリングゾールとその娘マティルデと打ち解けて、すぐに若い二人は婚約する。翌朝クリングゾールはハインリヒとマティルデに向かって「君たちが私に任せるならば、君たちが知識を増やさずちょっとした有益な見解を得られない日がないようにしよう。」(Bd.1 S.330) と言い、ハインリヒは「先生、なんて素晴らしい人生を僕に開いてくれるのでしょうか。あなたのご指導を受けて、僕は自分の前にどんな高貴な目標が置かれているのか、あなたのご助言を得てのみそれに到達しうるとわかるのです。」(Bd.1 S.331) と答えて、二人は師弟関係を結ぶ。ヴァルトブルクの歌合戦伝説では、ハインリヒが「君主賛歌」で賛美したオーストリア公から推薦状をもらいクリングゾールを訪ねたとされるが<sup>22)</sup>、ノヴァーリスは二人を義理の親子にして師弟の関係と

---

ランティスで、自然研究をする青年の歌により、芸術が再生したことを表す。この構図は失われた黄金時代を再び蘇らせようというノヴァーリスの思考パターンに則っている。

22) 「聖ルートヴィヒ伝」I.5 および「聖エリーザベト伝」第四章。岸谷・柳井：上掲書 139-140 ページ、142-143 ページと 149-152 ページ、163-165 ページ

した。

#### 4 クリングゾールのメルヒェン

第九章でクリングゾールは人々の求めに応じて、若い時に作ったメルヒェンを語る。これは弟子ハインリヒに向けた教えでもある。ここで語られる世界は上位に天界，中位に地上世界，下位に地下世界が存在する複雑な構造を持つ<sup>23)</sup>。天界では女王ゾフィーが去り，王アークトゥルスと女王フレイヤが残っている。ゾフィーは地上世界に来ていて，そこでは「父」と「母」が忙しく動き回る。二人の息子エロスはまだ赤ん坊であるが，天界から降ってきた鉄製のウロボロスを手にすると急激に成長して若者になる。乳母のジンニスタンは月の王女で，「父」との間に娘ファーベルをもうけており，「父」にも若者となったエロスにも秋波を送る。若者エロスはジンニスタンをお供にして旅立ち，ジンニスタンの故郷である月へ行く。その間，地上世界では書記の一味が反乱を起こして「父」と「母」を捉えるが，ファーベルは祭壇の後ろに地下世界へ続く扉を見つけて難を逃れる。地下ではスフィンクスが門番として鎮座し，その奥で三人の老婆が機を織っている。ファーベルは老婆たちにタランチュラを探すよう命じられて，地下世界を出て，天界に繋がる梯子を登り，アークトゥルス王の前に出る。彼女はここで願い事を叶えてもらう約束をとりつけ，その後は必要に応じてやってくる。ファーベルは地上に出ると，ジンニスタンと再会し，「母」が磔刑に処される様子を悲しい気持ちで眺める。その後，彼女は地下と天上を往き来して，老婆たちを退治し，老いたアトラスを生き返らせ，「母」の遺灰を壺に集める。ゾフィーは壺を受け取ると，遺灰を水盤に注ぎ，皆でその水を飲む。その後，蘇った「父」とジンニスタンが結婚し，ファー

---

参照。

- 23) メルヒェンの三層構造と人物相関図に関して G. シュルツによる図を参照した。Vgl. Bd.3 S.143.

ベルとエロスは天上へ向かい、エロスはフレイヤと結婚し、ゾフィーが帰還してアークトゥルス王と玉座に就く。

このメルヒェンではファーベルが東奔西走の活躍をする。彼女のおかげで、地下世界の老婆たちが退治され、地上世界で暗躍を目論む書記の一味は退場し、天界にエロスとフレイヤ、アークトゥルス王とゾフィー女王、地上界に「父」とジンニスタンのカップルが成立する。異なる次元でカップルが成り立つ構図は、モーツァルトのオペラ『魔笛』(1791)に倣っており<sup>24)</sup>、ここでは『魔笛』の王子タミーノと王女パミーナ、鳥刺しパパゲーノとパパゲーナの二組より多く三組のカップルが成立する。メルヒェンでは「三」という数が好んで用いられ、このメルヒェンで再生が三回—アトラスと「父」、フレイヤの場合—描かれるのも「三」という数の効果に係する<sup>25)</sup>。いずれの場合もファーベルがアークトゥルス王の元から連れてきた「黄金」と「亜鉛」が電気ショックを起こして瀕死の三人を蘇生させる。ノヴァーリスのメモに「電気、マグネティズムとガルヴァニズムを暗示」(Bd.1 S.386)とあるように、ここには19世紀初頭に流行したガルヴァニズム(動物電気)<sup>26)</sup>が取り込まれている。ガルヴァニズムは、イタリアの解剖学者のガルバーニ(1737-98)が、火花放電によって標本のカエルが痙攣したのを発見し、生物には電気があると論じたもので、その後ボル

---

24) ノヴァーリスは『魔笛』に言及しないが、モーツァルトの曲『クロエに』(K524, 1787年)の歌詞を少々違えて1798年のメモに記している。(Novalis: Werke, Tagebücher und Briefe Friedrich von Hardenbergs. Hrsg. Von Hans-Joachim Mähl und Richard Samuel. Bd.2. München/Wien 1987, S.331. 以下、本書からの引用は巻数とページを記す。)18世紀末に『魔笛』は人気を博しており、ゲーテの義兄ヴルピウスがシカネーダーの台本を改訂した『魔笛』を1794年1月16日にヴァイマルで上演し、劇場監督のゲーテがこれをレパートリー化したことを考えると、(原研二『シカネーダー伝—『魔笛』を書いた興行師—新潮選書, 1991年, 204-208ページ参照。)『魔笛』がノヴァーリスや仲間の話題になっても不思議はない。

25) Vgl. Michael Mandelartz: Goethe, Kleist. Literatur, Politik und Wissenschaft um 1800. Berlin 2011. S.28.

26) 今泉文子訳『ノヴァーリス作品集2 青い花・略伝』ちくま文庫, 2006年。訳者による『青い花』解説, 401-402ページ参照。

## 詩と魔術

タの説の台頭により科学の表舞台から姿を消すのだが、ノヴァーリスは「黄金」と「亜鉛」により、アトラスと「父」、フレイヤの身体内に宿る動物磁気が活性化して三人が蘇生するという具合に、ガルヴァニズムをそのまま用いた。ノヴァーリスは当時話題になっていたガルヴァニズムをファーベルに実演させたのである。このメルヒェンの登場人物は皆、概念の寓意であり、ファーベルは「寓話 (Fabel)」を意味する。「寓話」が最先端の自然科学の知識を自家薬籠中のものにして瀕死の者を再生させたのは、メルヒェンにおいて起こる奇跡にしてノヴァーリスの考える魔術でもある。

メルヒェンの末でファーベルは歌う。

永遠の王国が建てられました、  
愛と平和のうちに争いは終わりました、  
数々の苦しみの長い夢は過ぎました、  
ゾフィーが心の永遠の司祭です。(Bd.1 S.364)

「愛と平和のうちに」という言葉は、「愛」がエロス、「平和」がフレイヤを指すため、二人の結婚を意味し、二人が結婚したことにより、「永遠の王国が建てられた」となる。「数々の苦しみの長い夢」は、地下世界の老婆たちの企みや書記一味による反乱、「母」が殺されたことを指す。「母」は先行研究において「心、人間の『道徳的』『宗教的』能力の具現」(Bd.3 S.173)と見なされており、ゾフィーとエロス、ファーベル、ジンニスタン、「父」が「母」の遺灰入りの水を飲むことは、「母」をそれぞれの内に宿すことに他ならない。「叡智」を意味するゾフィーは「永遠の王国」において、皆の内部に宿った「母」=「心」を司る「永遠の司祭」として崇められる。そして小さな女の子ファーベル、すなわち「寓話」は、三つに分離して硬直化した世界、天界と地上世界、地下世界を活性化し、これらをまとめて一つの新たな世界を創り出す原動力になる。ここではファー

ベルが自律的に働くが、ファーベルを動かすのは本来詩人の役割である。クリングゾールはファーベルの活躍と詩人の役割を重ねて、ハインリヒに詩人の意味を論している。

## 5 詩=魔術

ノヴァーリスはクリングゾールをハインリヒの師匠になる詩人として描いたが、ヴァルトブルクの歌合戦伝説では魔術師とされる。伝説によると、クリングゾールは一夜のうちにハンガリーからアイゼナハまでハインリヒと移動し<sup>27)</sup>、アイゼナハで彼は夜空を見上げて、ハンガリーの宮殿で聖エリーザベトが誕生して方伯の息子と婚約すると予言し<sup>28)</sup>、占星術師の側面を見せる。その後、彼はヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハとの歌合戦でなかなか勝利を得られないため、自分の代わりに「悪魔 (tufil)」ないし「霊 (geist)」を使ったが、やはり勝てなかったという<sup>29)</sup>。ノヴァーリスがクリングゾールのメルヒェンにガルヴァニズムを取り入れたのは、人間が自然観察から得た知識を駆使する営為こそ「魔術」であると考えた証である。彼は病気のため第二部の冒頭を執筆するに留まったが、「ハインリヒはクリングゾールとさまざまな奇妙なしるしについて話す。彼はかつて自分が作った歌を夜に聞く。キュフホイザーへの憧れ。彼はクリングゾールにそれを話す。(略) 彼はハインリヒをマントに乗せてキュフホイザーへ連れて行く。」(Bd.1 S.398)とメモに記し、魔術による移動で二人をキュフホイザー山へ赴かせ、ハインリヒがクリングゾールから魔術を学ぶこ

27) 「聖ルートヴィヒ伝」I.5 および「聖エリーザベト伝」第五章、岸谷・柳井：上掲書 139-140 ページ、142-143 ページと 152-155 ページ、165-166 ページ参照。

28) 「聖ルートヴィヒ伝」I.6 および「聖女エリーザベト伝」第六章、岸谷・柳井：上掲書、140-141 ページ、144 ページと 155-158 ページ、167-168 ページ参照。

29) 「聖ルートヴィヒ伝」I.7 では「悪魔」、 「聖エリーザベト伝」第七章では「霊」や「悪魔」と呼ばれる。岸谷・柳井：上掲書 141-142 ページ、144-145 ページと 158-161 ページ、168-170 ページ参照。



とを予定していた。マントに乗って空を移動するアイデアも、1783年に気球の有人飛行が実現したことを踏まえれば、単なる夢物語ではない。ノヴァーリスは自然科学の発展に魔術の可能性を見て、詩人が自然に通じて魔術を操ることを期待した。

さてヨーロッパの精神史において、神的な存在から発する光が森羅万象に行き渡るとする、古代ギリシア由来の自然観が脈々と受け継がれてきた。そこでは、マクロコスモスとしての宇宙と人間をはじめとする動物・植物・鉱物等のミクロコスモスは照応する。歌合戦伝説のクリングゾールに見られるように、占星術師が魔術師とみなされたのは、天体の動きを観測して地上の暦を作成する占星術師は未来を読み解く者＝予言者であり、地上において宇宙に関わる技を繰り出すことを期待されたためであろう。「伝統的な魔術は、すべてのものが元は一つのものに由来しているゆえに、万物は互いに関わり合っているという「シンパシー共感」や「コレスポンデンス万物照応」の考えに基づいて成立する。これに対し、ノヴァーリスにとって、この関わり合いはいま「存在していない。」<sup>30)</sup>16世紀にコペルニクスが地動説を唱えて近代的宇宙像が広まると、古の自然観は時代錯誤と見なされ、それゆえにノヴァーリスは「共感」や「万物照応」が「存在していない」と考えた。彼は『一般草稿（百科全書のための資料集）』（1798/99）の885番で「一般的な内的調和的關係は存在しないが、*あらねばならない*。（魔術、占星術等に基づく推論。—それらは未来の図式—）／絶対的*現在*。（*あらねばならない—存在せねばならない*。）」（Bd.2 S.680）と述べ、「内的調和的關係」すなわち人間と自然の本来の關係の復活を魔術に託す。

では詩人が身につける魔術とは何なのか。ノヴァーリスは『一般草稿』137番で次のように述べる。「魔術。（神秘主義的言語学）／しるしとしるされるものとの*共感*。（カバラ学の根本理念の一つ）」（Bd.2 S.499）。ここでは魔

30) 中井：上掲書176ページ。

術と言語が並置される。言葉を用いる詩人が「しるし」を付けることによって「しるされるもの」が生じるが、「しるし」と「しるされるもの」は切り離されるのではなく、互いに関係を持つという。「しるしとしるされるものとの共感」について、ノヴァーリスは次のように記す。

花々の会話。動物たち。

ハインリヒ・フォン・アフターディンゲンは花—動物—石—星になる。  
本の最後にやはりヤーコプ・ベーム。(Bd.1 S.392)

メルヒェンでは、花々や動物は互いに会話をし、人間もそれらと話をする。詩人はメルヒェンの世界にいるように森羅万象の会話に加わり、それが「花—動物—石—星になる」と表現される。別の箇所「ハインリヒは狂気のうちに石—<花>響く木—黄金の雄羊—になる。ハインリヒは世界の意味を言い当てる。彼の自発的狂気。彼に課されるのは謎である。」(Bd.1 S.395)とあり、森羅万象との会話は「狂気」の中で行われるという。ただし狂気は「自発的狂気」と言い換えられ、ハインリヒが自発的に狂気の状態に身を置いたとされる。「狂気(Wahnsinn)」という語は「思い込み／錯覚(Wahn)」と「感覚(Sinn)」から成り、「思い込み／錯覚」の語源がゲルマン語の「期待(Erwartung)」にあることを踏まえると、「期待」を抱く「感覚」と読み解くこともできる。『青い花』第一部の題名はまさに「期待(Erwartung)」であり、彼の「狂気」は「期待」を抱く「感覚」に因り、彼は「自発的な狂気」の中で自然との本来の関系の復活を「期待」していると考えられる。引用末に置かれたベームの名は、ノヴァーリスが1799年8月から1800年にかけてベームの著作を手にとった伝記的事実と関係し<sup>31)</sup>、彼がベームの『シグナトゥーラ・レールム』における「神の

31) 中井：上掲書 427 ページ参照。

言葉」と「自然の言葉」と「人間の言葉」を結ぶきずなの回復をめざす<sup>32)</sup>考え方を引き継いだことを示す。自然観察から得た知識を技術に変えて、自発的に「花」、「動物」、「石」、「星」といった自然界の事物と等しい存在になり、会話を交わすように自然に働きかける者が、ノヴァーリスの理想とする詩人なのだ。

## 6 結び

『青い花』が未完であるにもかかわらず、ロマン派の代表作として読み継がれてきたのは、異世界への鍵となる青い花が強烈な印象を与えることに加えて、ノヴァーリスの描く詩人＝魔術師の像が魅力的だからであろう。フリードリヒ・フォン・ハルデンベルクは当時最先端の自然科学をフライブルクの鉱山学校で学び、亡くなる直前まで役人として鉱山産業に従事しており、常日頃から山の内部に広がる神秘的な世界を目にして、鉱石を掘り出す人間の営為について考えたに違いない。彼にとって自然は第一に鉱山の風景であり、文学仲間と語らいながら、自然と人間の関係に再び調和をもたらす存在を希求した。それは詩人のあるべき姿を問うことに他ならず、ノヴァーリスとしての自己形成となり、詩人の自己形成は『青い花』の主人公にも投影される。ノヴァーリスは作品冒頭の「献辞」で「歌の力」を言祝ぎ、主人公が第一部で詩人の役割を認識し、第二部で自然の言葉を駆使する魔術師に変容すると計画していたのであろう。ノヴァーリスは伝説の詩人ハインリヒ・フォン・オプターディングンの若き日に舞台を設定することにより、詩＝魔術の追究を志す詩人のはじまりを描いたのである。

---

32) 中井：上掲書 303 ページ。